

向井元升の家系

中西 啓

江戸初期の儒医向井元升は、慶長十四年二月二日（一六〇九年三月七日）肥前国（佐賀県）神埼郡（千代田町）崎村に生まれ、延宝五年十一月一日（一六七七年十一月二十五日）に京都に没した。その父祖について二種の系図が伝えられている。一つは長崎向井氏の「向井氏系譜」^{註一}で、他は崎村向井氏の「向井氏系図」^{註二}である。また、元升先生墓誌（貝原益軒撰）にも所伝がある。系図の所伝と墓誌の所伝を比較すると、系図は長崎、崎村ともに元升の祖父を兼義、父を兼秀という。ところが、墓誌には祖父を兼秀、父を兼義という。

益軒の墓誌撰文は、元升の長男元端の依頼によるが、益軒自身も元升到治療を受けていたので、既知の関係者であった。元端兄弟が父の墓誌を依頼するのに、自ら「亡父行歴之草稿」を作成しているので墓誌の記載が正しくて、

系図の記載が誤っていたと考えねばならないであろう。元升から五代前の兼房以後を示す。（それ以前はここでは省略）

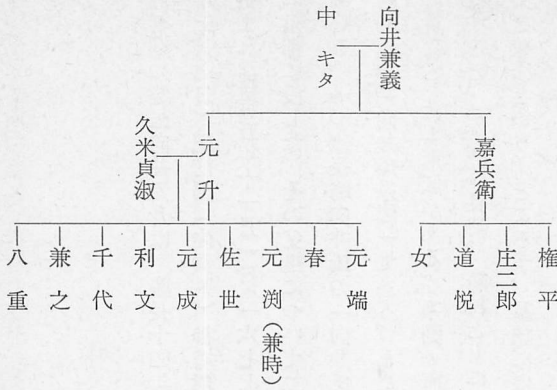
兼房—兼房—兼義—兼秀—元升

この長崎向井氏系譜は元升の長男元端兄弟の努力で復元されたもので、元禄十三年（一七〇〇）ころには一応の形を整えたものと考えられるが、山科持言によってその序が書かれたのは宝永三年九月二十六日（一七〇六年十一月二日）である。この年九月朔日（同年十月七日）には、樽林鎮山の「紅夷（毛）外科宗伝」の序を向井元端の依頼で貝原益軒が書いていたので、元端は当時、自らの関与したものを整理し終ろうとしていたと思える。

向井家の系譜作成には、元端、兼時（号去来、元潤）、元成の三兄弟が「諸方を探り求め、高房父越後守鎮房五代之孫女馬渡新七後継といひける者の母伝へ持たるを尋得て、即本紙を写し新に譜牒を作れり」という持言の一文が物語るように、その努力を惜しまず、新しい譜牒完成に至ったものであった。この三兄弟中、元端は宮中典薬、元成は長崎書物改役で、ともに重職なので、諸方を探り求める時

間的余裕はないと思える。だから兼時が佐賀の馬渡新七母を探し当て、系譜を写したものと思える。長崎向井家文書には馬渡新七母との交渉資料が現存する。

つぎに元升一族の系図を示す。



註一。『向井去来』（昭和二十九年刊、長崎市役所内、去来顕彰会場）

『長崎叢書増補長崎略史』上巻、第十六卷、「長崎名家略譜」（大正十五年刊、長崎市役所発行）
 註二。「向井氏系図余説」（昭和二十九年二月四月号「楠」所収、拙稿）

（国立療養所長崎病院）